



| | |
|--------------|---|
| Title | 其角年譜詩稿 (六) |
| Author(s) | 今泉, 準一 |
| Citation | 明治大学教養論集, 223: 59-98 |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/12217 |
| Rights | |
| Issue Date | 1989-03-01 |
| Text version | publisher |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| DOI | |

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

其角年譜試稿(六)

今泉準一

元禄六年(二六九三)癸酉 三十三歳

秋○七月 父東順病(『萩の露』)。

○七月始 父の見舞のため、其角の弟、信濃より来る(同)。注八六。

○また他家に嫁したる妹も枕頭にあり(同)

○其角、妹の医王善逝に祈る旨願に、

萩の露はまくり貝にくすり哉

の句を書き添え、これを父の臥す蚊帳に貼る(同)。

○七月刊記 桐風編『誹諧異竹』、其角点が載る。資料篇九一。

○八月 弟、信濃に帰る。弟との別れの座にて、

空や秋蚊帳をあくれは七多羅樹 其角

月にかゝやく五色の雲 東順

死症には千草の露の験もなし 同

○八月十日（あるいはそれよりすこし前）

仙化・介我・神叔と、病家の伽に、四吟歌仙一卷（『萩の露』『薨の』の巻）。

○八月十日 西鶴没。西鶴の遺稿『名残の友』に其角との交友の記載が載る。なお、其角が西鶴の死を知ったのはこれより後のことであろうが、『句兄弟』にその死に触れた記載がある。注一八参照。

○八月十日 神叔・介我と三吟歌仙一卷（『萩の露』『薨や』の巻）。

○この前後、父の病、小康を得てか、介我・桃隣とともに芭蕉庵を訪ぬ。芭蕉留守にて、主なき庵に入りて、三吟歌仙一卷（『陸奥衛』『生綿取』の巻）。

○八月十五日 病床にある東順の望みにて、枕元に一樽を設け、知友を集めて月見の宴。集まるもの、仙化・嵐雪・神叔・介我・枳風・桃隣・幸隣・鉄松・芝蕙・素イ・平砂・万巻・東潮。五十韻一卷（『萩の露』『名月は』の巻）。

○八月十八日 病父心よしと聞えけるにとみのかいとまたまはりて、浅草寺に詣で、帰途、泉陵院に立ち寄り、月見。即興の一卷。連衆、其角・固文・孤屋・利牛（『萩の露』『寺の月』の巻）。

○八月二十日付 白雪宛芭蕉書簡に、其角の発句一がその近況報告の中に載る。
弟の信濃にありけるを

語て病父を慰ると

老か子は信濃にもありけふの月 其角

（『校本芭蕉全集』『書簡篇』）

○八月二十九日 父東順没。七十二歳。「崩心の悲」を懐いて芝二本榎上行寺に葬る。

一 鉢に蟬も木葉も脱哉

これを発句に、独吟五十韻を綴る（『句兄弟』）。

○芭蕉の『東順伝』成る（『句兄弟』）。

○九月刊記 壺中編『俳風弓』発句一入集。資料篇九二。

×孤屋と両吟未完歌仙三十四句。四句を残して孤屋上落（『炭俵』）。

×露沾・其角・露月・露荷・荻子・コ谷・沾荷の歌仙一卷（『三家雋』）「六吟歌仙」、「むもれても」の巻。注八七。

冬○十月九日 素堂亭残菊の宴。会者、芭蕉・其角・桃隣・沾圃・曾良・馬寛（『続猿蓑』）。

○十月十八日 父東順七七忌。独吟五十韻満尾（『句兄弟』）。注八八。

○十月刊記、露川編『流川集』発句六・歌仙一入集。資料篇九三。

○初冬跋 雲鼓編『花園』発句二入集。資料篇九四。

×芭蕉・沾圃と三吟三ツ物一（『翁草』）「月やその」の巻）。

○十一月上旬序 荷兮編『曠野後集』発句八入集。資料篇九五。

○十二月十七日付 塵生宛去来書簡に、自句の近作を報じ、つぎに「其角句」として、「秋の空尾上の杉を離けり」を

挙げ、「その外めづらしき句も不承候」とある（飯田『蕉門俳人書簡集』）。

○冬序 巴水編『薦獅子集』発句二入集。資料篇九六。

○この年 父の終焉記『萩の露』出版。文一・発句五・五十韻一・歌仙三・付合一入集。

△この年のある日 久松肅山亭で、芭蕉・素堂とともに探雪の絵に讚す（『末若葉』）。

△この年成るか 許六編『五老文集』。其角点あり。注八九。資料篇九七。

元禄七年（二六九四）甲戌（五月閏）三十四歳

春〇歳旦吟

年たつや家中の礼は星月夜

〇右発句、表八句成る。其角・介我・岩翁・枳風・彫棠・横几・芭蕉・仙化（『甲戌歳旦帳』）。資料篇九八。

〇元日刊記 東潮編『松かさ』発句一入集。資料篇九九。

〇正月刊記 助叟編『遠帆集』発句二入集。資料篇一〇〇。

〇亡父の追善に独吟三十四句（『句兄弟』「ちんはひく」の巻）。

〇二月二十五日付 許六宛芭蕉書簡に江戸俳諧に触れて「江戸他家之事は評判無益と筆をとらめ候其角嵐雪か義は年々

古狸よろしく皷打はやし候半」とある（『校本芭蕉全集』「書簡篇」）。

△三月三日 其角・介我・桃隣三ツ物三（『柿表紙』「葛城の」の巻他）。

〇このころか 英一蝶と栢筵（当時七歳）を伴い、吉原へ行く（白石悌三他「英一蝶の青春」『日本文学』三十四号）。

注九〇。

夏〇四月初 上方の轍士、江戸に下り、其角宅に泊す（『此日』）。

〇四月十四日 轍士を迎えて百韻興行。連衆、轍士・其角・介我・専吟・未陌・氷花・嵐雪・紫紅・桃隣・百里・神叔・尺草・岩翁・執筆・立志・乙州（『此日』「卯の花に」の巻）。

〇右百韻を『此日』と題して轍士編にて刊行。板下其角。注九一。資料篇一〇一。

×長崎勤務の泥足、江戸にあり、泥足の招待を受けてか、嵐雪・紫筆・神叔・薯刀・湖月と七吟歌仙一卷（『其便』「青

嵐」の巻）。

〇五月上旬後序 素牛編『藤の実』発句一入集。資料篇一〇二。

○五月八日刊記 子珊編『別座誦』発句一入集。資料篇一〇三。

○五月十三日付 浪化宛去来書簡に、『有磯海・となみ山』の選集のことに触れ

其角が、有磯海のけしきにもかよひ候へんと申候而、山の発句を仕候も、定而榎谷辺の事おもよせたるにて可_レ有_二

御座と奉_レ存候

と書き、また其角の句

梅折_{ちぎ}て柳の枝をまたがせん

を挙げ

「またがせん」と謂、……己が力を古詩・古歌の上ニせめ_あてて用ヒ申候。さなく候へば、たゞ詩を、歌を、発句に直したるまで二候。

と述べている（飯田『蕉門俳人書簡集』）。

×五月二十八日 浅茅が原逍遙。柴零・介我と三吟歌仙一卷（『句兄弟』『ゆふたちや』の巻）。

△關指・芭蕉と三吟三ツ物（『二葉集』他、「笠寺や」の巻）。注九二。

×夕桜、其角を訪ね来る。閑談。連句十句（下略）成る（『卯花山』『我雪と』の巻）。注九三。

○五月序 順水編『俳諧童子教』発句三入集。資料篇一〇四。

○五月序 友琴編『卯花山』発句・連句一入集。資料篇一〇五。

○江戸下りの轍土とともに連句十三卷あり。其角・轍土・露徳、三吟歌仙「日をまでや」の巻。轍土・仙花・素イ・其角・百里・氷花・穹風・湖月・神叔・介我・揚句執筆、十吟世吉「日本橋」の巻。露沾・轍土・其角・介我・沾荷・言荷・秋帆・執筆、五吟世吉「いつ老て」の巻。嵐雪・轍土・百里・神叔・介我・其角・氷花・紫筆・湖月、九吟歌

仙「根のつくや」の巻。柴霽・其角・轍士・神叔・菟株、五吟半歌仙「橋行は」の巻。氷花・轍士・嵐雪・介我・其角・湖月・執筆、六吟歌仙「五房を」の巻。轍士・専吟・尺草・琴風・其角、五吟二十四句「夏草や」の巻。轍士・沾徳・尺草・其角・東潮・介我・横几・子堂・執筆、八吟世吉「頂卷に」の巻。轍士・湖月・直方・尺草・其角・神叔、六吟歌仙「蚊屋出さて」の巻。岩翁・其角・轍士・横几・尺草・桑露・六吟歌仙「水貝に」の巻。轍士・百里・神叔・嵐雪・氷花・仙華・介我・其角、八吟歌仙「物おもふ」の巻。龜翁・轍士・専吟・尺草・其角・平砂、六吟歌仙「明はなす」の巻。〔七車集〕。

×六月八日 關指・山峰と三吟歌仙〔句兄弟〕「贅数に」の巻。

□二十一日、浪花へ次の書状を送る（井波誌）。

両国ばしにて

千人の手を欄間や橋涼ミ

古詩に傾城ヲ玉手千人ノ枕とつくり候も、此詩に根ザシ申候。手のかはる所ヲ（中略）そこはかと折ふし御慰ニ書添申候。猶重而委曲可レ得ニ高芳ニ候 以上

六月廿一

其角

浪化雅公

×湖月・素イ・紫紅の三人、其角亭訪問。雨。歌仙三十二句成る。雨晴れて三人帰る〔句兄弟〕「雨の脚」の巻。

×六月二十四日 専吟・沾徳と三吟歌仙〔句兄弟〕「舟人の」の巻。

×肅山・彫棠と三吟歌仙〔句兄弟〕「飛螢」の巻。

○六月二十八日 野坡ら編『炭俵』発句一四・未完歌仙一入集。資料篇一〇六。

○六月序 安之編『能野からず』発句一入集。資料篇一〇七。

△轍土編『七車集』成る。連句一二入集。注九四。資料篇一〇八。

□夏のある日「晝傘之説」と題して一文を草した。

注八六 其角の弟については注五三で、『温故』（晋永機著、明治三十三年十月二十日出版）に載る、その墓が信州に発見された旨の報告とその墓の詳細を述べた一文を紹介した。なおその項でさらにつけ加えて「其角と妹との交際は父東順没後も其角の句文から知られるが、弟との交際は、東順没の記載の『萩の露』以外に知られず、とくに其角没の際の弟妹の消息は、知人・門弟の句文にまったく言及されていない。もし其角の弟がここにあるような、寛保四年二月三日没であるなら、其角没の際の何かの形で言及があつてよいと思われるので、明治三十年刊の『温故』の記載はこの点だけでも意外の感じがするとし、この記載に基づく現地への訪問も行っていないので、いまはこれにつけ加えるものがないが、一応の紹介をし後考をまつことにする。」としておいた。その後、昭和六十二年十一月十八日付、郷土史研究家浜森十氏（岡谷市住）より書簡をいただき、つぎのような御教示を得た。『温故』記載の上伊那郡朝日村赤羽（現在辰野町）に現在も墓所のある由、また同墓所の菩提寺（真金寺という）も現存するが、同寺の調べでは、住職もよそから来た人に代り、火災にも逢い、詳細は不明とのことである。なお、其角の妹については後に注す。

注八七 『三家集』には「六吟歌仙」と題して載るが、実際には七吟歌仙。芭蕉の判詞が載る。連衆の一人、荻子は享保十四年没。五十七歳（『俳諧大辞典』）。『猿蓑』に荻子の発句一入集。『猿蓑』発刊の元禄四年、逆算すると、荻子は十九歳。発句が秋であつること、荻子が加わっていること、および芭蕉の動向とを合わせ考えると元禄五年か元禄六年の作品と推定される。

注八八 この五十韻は、『句兄弟』では、後書きに「四十こゝのかに当ぬる日五十句にみちたれば是を誦経の後追善に備へ侍る也」とあり、父東順の四十九日忌がこの日に当たるので、ここにおいた。なお、後書き「五十句にみちたれば」とあるが、『句兄弟』に載る五十韻は、二の折裏が十二句となつていて、二句不足している。『俳諧みみな草』（明治十四年板・其角堂永機編『俳諧叢書』『俳諧註釈集下巻』所収）の「上」「晋子年考」には、『句兄弟』のこの五十韻を「同（元禄六年八月）二十九日二本複製「上行寺」と東順の埋葬の項のあとに載せこの折裏十句目のあと、つぎのような挿入文および二句を載せている。

（此所二句、梓行成れる時の落書にして、句兄弟錦繡段にも見えず。さるを予が門下に、句兄弟草稿の切二葉を秘蔵す。それら照し合はせて、茲に落書の二句を得たり、嗚呼一百五十年の今にいたり、五十句に満ちぬるも、派翁の徳孤ならざる所と

讀ひつべし。

(落書の二句)

酒の香に雨のぬれ肌がわくらん

泊るところを行先の旅

このあと、『句兄弟』の二の折裏十一句目、すなわち「仏壇は」云々の句、揚句後書き、と載る。ただ、すでに指摘したように(注三七)、『みづな草』の記載はその年譜に關するかぎり「証句とする発句は事実とは別箇の創作と考へるべきだと思われる」ものを証句としているものが多い。従つて「晋子年考」とある其角年譜には訂正せられねばならぬ箇所が多い。しかしそれだけではなく、証句とするものの解釈に疑問の生じるものもある。いまその一例を挙げると、この五十韻の脇の句、「今そふ母も片袖の露」のあとに次のような挿入文がある。

(順後妻を迎へし事、此脇をもつて知るべし。順死後いかにや未考)

これによれば、この句を東順の後妻を詠んだ句と解しているようである。しかしこの句は其角が父より六年前に死んだ母を思い起し、あの世での父母の再会を思い、「今そふ母も片袖の露」と詠んだものとれよう。しかもこの解釈の方が自然ではなからうか。従つてこれを証句に、東順に後妻があったとするには疑問が生じる。これは一例であるが、注五三で、其角の弟の墓について「意外の感じがする」と述べたが、ここでの二句発見の件も同様で「一応の紹介をし後考をまつことにする」以外にない。旧稿を整理して行つたものでろうと推定され」とある。さらに

注八九

『芭蕉研究』第二輯、「芭蕉と許六」(尾形)によれば、『五老文集』は「元禄二年に筆を執られ、元禄六年の冬頃迄、時々

又元禄四年の夏には「信濃路や繩にすはるゝ瘦法師」の句につき、「此句江戸にて其角にかたりければ、秀逸とて感じ侍ける」(五老文集)と見えたことは既に述べた。而して文集にはこの「信濃路や」の句の上に「キ」キとして長点の付墨が見えるのである。文集に載せられた句についてこの類の「キ」又ハ「其」と肩書のある引墨は四十四句に及び、更に其角校閲の印と思はれる朱の「々」々圈点四十七、しめて九十一句に上つてゐて、しかもそれらの中にはその添削又は判と見られる頭書或は脇書さへ見られるのである。

(略)

猶又文集にはかうして其角の批点と考へられるものとは明瞭に其の形趣を異にしてゐると識別される引墨が加へられて居り、しかもそれが時に其角の付墨と混同され易い様な位置にある時には、「翁」と肩書を加へてあるので、その其角とは異つた付

墨が芭蕉のそれであることが推定せられる。

とある。資料篇九七は、『俳書叢刊』『五老文集』によったが、其角の付墨および芭蕉の付墨と思われる部分すべてを載せた。

注九〇 同書の「英一蝶年譜」に

元禄七年

○栢筵（二代目団十郎）、この年七歳。「我幼年の頃、始て吉原を見た時、黒羽二重の三升の紋の単物振袖を着て、右の手を英一蝶にひかれ左の手を晋其角にひかれて日本堤を行し事」（『神代余波』所引の『老の楽』）というはこの頃か。「但し、現存の抄本にはこの条なし。

とある。

注九一 酒竹文庫本書込に「板下其角」とあり、同じく板下其角とされる其角自身の編著や『其便』・『涼石』と比してこのことは首肯できる。また資料篇には同書の全文を記載した。

注九二 關指と其角との関連は、元禄七年ごろに始まると考えられる（『俳文藝』二四、今泉「宝年晋子消息連句」）。芭蕉が第三に加わっているので、このときと推定した。なお、『三物拾遺・地』（享保十五年三月序）に、

○旧会

笠寺や乗敷さます一涼
關指 福居連中

二人していさ大きな爪
其角

裁物に麻のきれ端よろこひて
芭蕉

とある。

注九三 『卯花山』が元禄七年五月序の集なので、このとき以前のこととしてここに置いた。事實は発句より見て、元禄四年冬のことではないかと思われる。本集上様に当たって過去の作品を載せたものであろう。ただし、適当な発句がなかったので、あるいは夕桜がとくにこの句を立句に望んでの連句とも考え得る。従って、一方的に元禄四年冬と決めることもできない。

注九四 原本、序・跋・刊記なし。しかし、本年（元禄七年）の夏の項「四月十四日」にすでに掲げたように轍士はこの年江戸下り、

『俳諧此日』を刊行、この序文によれば、これに載る百韻は江戸下りの最初に成ったものをこれだけは別に刊行したものらしく、従ってこのときの江戸下りにさらに多くの俳諧興行があったことが推測される。この作品がこの『七車集』であったと考えられる。十二巻の俳諧の連衆名を見ると、このとき不在を指摘し得るものはなく、また季節、および内容から見ても四月十四日

の百韻興行の後、引き続き江戸滞在中に成ったものを一括して刊行したものとしてよい。なお、この指摘はすでに『俳諧大辞典』の「七車集」の項にもなされている。

資料篇

九一

『俳諧吳竹』

是歳首夏之日桐風何其冥靈堂

一品の脇起りの歌仙競に勝ッ

都て六十四点なり則其角

調和露言不角の四師に

ひそかに伺ふみなそれくあり

左に記す

一品点 鳥 馬 四点 三點 (長) 二点半

其角点 (二字) 二点 四點 (丸乙) 三點 二點

調和点 両長 五點 增朱 四點 (朱長) 三點 (長) 二〇一点半

露言点 銀長 五點 加朱 四點 (朱長) 三點 (長) 二〇一点半

不角点 五葉 五點 交葉 四點 月葉 二点半 朱葉 三點 長 二点 円月 一点半

此秋も寝覚せよとや新茶売 一品

一品 其角 調和 露言 不角

平点 平点 ○ 長 平

桐風

夏の
其角曰
樓住居の涼ミ見おろし

一角調言不

● 平増無〇

川向ひ経緯虹の糸はへて

露言曰尚あらば

一角和言不

長平無〇長

日陰かハかぬ北の細道

一其和言不

無点 丸増無 日葉

月うつる水控のしめし茸

一晶曰水辺打越

一角和言不

平無〇〇〇

霧埋込て守りてなき関

一其和言不

長二字無無無

菊も香も果ハ五輪の敷瓦

の 其角直シ

一其和言不

長平平〇朱長

方角撰らぬ旅の首途

一其和言不

鳥 無点 朱 長 五葉

九重も延曆迄は定らて

一 其 和言不
長 無点 朱 無平

和銅以前ハ錢の名もなし

其角曰年号並へてハいかうし

一 其 和言不
鳥 平 長 ○ 無

神仏ひとつに祭る法華宗

一 其 和言不

● 乙 両長 ○ ○

瘡ソリの中に夢の物怪

一 其 和言不

● 乙 長 長 長

月雪のふたり妾を追出して

一 其 和言不

● 無点 長 朱長 無

老に備へん親の敵討クダツ

露言曰ク敵討クダツ

一 其 和言不

平 丸 無 ○ ○

鷲ナゲクソノを剃れば鬢モトイも若やかに

一 其 和言不

鳥 平 無 ○ 長

紋染さする衣の注文

一 其和言不
● 平長加朱

譲らるゝ舅の家の花更て

一 其和言不

長乙 ○ 無無

十日廿日とかへる賭弓

一 其和言不

寫丸長平長

春むかし神争の両鳥居

一 其和言不

無平無無無

畔をへたてゝせぬ蛙啼キ

一 其和言不

鳥三字長平無

南屋ハ吹ぬく風に颯ササつらす

其和言不

鳥乙 ○ 銀朱葉

せめてひろかれ魂祭ル棚

一 其和言不

平丸無 ○ 交葉

刃とく何長陣も露の世に

一 其和言不

平無無平無

とりへ八月のまろき法談

調和不角曰尺教打越

- 一 其和言不
- 鳥平 両長加朱
剥衣ヒを夜寒にかへす荒夷
- 一 其和言不
- 平無無平無
撫れは苔の岩もやハラカ
- 一 其和言不
- 平乙無○長
佛ハ二八廿よすへらかし
- 一 其和言不
- 平無長平朱葉
あれや聖を落す同類
- 一 其和言不
- 平無平平
今もその肘カドナに残る入ぼくろ
- 一 其和言不
- 二字無無無
有し大坂の肥後殿の石
- 一 其和言不
- 無無○無
笠にかく傘を群レの伊勢参
- 一 其和言不
- 無無無平
枚ハを含む夜の軍令
- 一 其和言不

寫平○平長

琴の音を立聞塀に穴明けて

一 其和言不

● 無無○長

何俳哥を次の小坊主

一 其和言不

長 平 平 ○ ○

風吹込し座のこほれ梅

三十三点 一品

廿五点 其角 まことに一品ハ

廿一点 調和 其角か下に

廿七点 露言 立む事かたく

二十点 不角 其角ハ一品か

上に立む事

かたかるへしと誰やらの

謂しや

(国文学研究資料館・頼原文庫)

九二 『俳風弓』

友猿のともえらひすな花衣 其角

(綿屋文庫)

九三 『流川集』

誰かためそ朝起ひるね夕涼 其角

川筋の関屋はいくつ今日の月

世の中になにやさかしき雉の耳

さゝれう物か恋の相口
 勘当の草鞋も解す姉の里
 若きは都て破る毒断
 月の夜の薔麦の中に京の東山
 白きを薔麦の花と見る霧
 初嵐川幅あまる帆掛舟
 窓より鉢を入る手の艶
 章を拾ふてかくす親の慈悲
 長さを伊達にしたる筭
 比もはや肌帷子を花に着て
 摘ても跡のくろむ杓杞垣
 几翁水徳考角几水翁考徳

亀翁元服

元服や丹波の小雪ふれこんこ
 元服の袖にこほらぬ鏡かな
 支考
 其角

(蕉門俳書集一)

九四 『花園』

蚊柱に夢のうき橋かゝる也
 炭焼のひとりそあらん竈の際
 キ角

(国文学研究資料館・瀬原文庫)

九五 『曠野後集』

それよりして月夜鳥や郭公
 其角
 状のはしに
 この松にかへす風あり夕涼み
 この人数舟なれはこそ涼みかな

詩経に夏は散居と侍る深川の旧庵より川つらを見れば舟にてふさぎ申候

軒合に猫よく寝たり下すゝみ

荷カ今か許に寝臥せし友達したひて

青アヲ初の蒼アヲかそへはたれくそ

よこ雲やはなれくのそは畑

待恋

ほとゝきす我や鼠にひかれけむ

江戸宰府にて

守る梅の遊仕ことや野老売

(綿屋文庫影写本)

九六

『薦獅子集』

高砂住の江の松を古今万葉の

ためしに引れしより塵うせず

して連歌につたふ然るに此松

は枝葉百間にあまりて諸木に

ことなる気色尤誹諧なるへし

蓬菜の松にたてはや曾根の松 江戸 其角

暮の市誰を呼らむ羽織殿 其角

(洒竹文庫)

九七

『五老文集』(略)

からふして坂本にとまりぬぬれたるものなとかはかし焼火して旅のうさをわすれ侍ぬ

キ(朱) 鉢の木やぎや浪殿や入し雪の宿

十二日夜明てたつけふは荷はれて臼井の半年路を越へたりきのふの雪の高さあたかも尺に過たり羊腸の岩路を攀て山中の茶やにかきこまれぬ駕籠荷なふおのこの初雪のふりけるなと、いへは所の人もめつらしき物のふりたるなと、いふも尤雪の徳なりけり

初雪に(朱)や信濃のものもやさしきよ(朱)事(朱)

ことし六月の末に此海道を下りしころのあつさに引かへたる事よ此峠を上ルに善光寺へ詣つる法師はらの背にいみしく縄の取つきたるをみて

キ(朱) 信濃路や縄にすはるゝ瘦法師

此句江戸にて其角にかたりければ秀逸とて感し侍けるけふは終日浅間のけふりを見る

地獄にもおなし雪ふる浅間かな(朱)
焼石とおもへは重し笠の雪(朱)

暮かゝるに八幡といふやとりに伏ぬ

(略)

キ(朱) うき世かな夫婦むつまし和田の雪

猶たとりく下る山路の入あひ過ルころ下の諏訪に宿をかりて温泉にひたり旅の草臥をやすめぬ湖水の東にあたり山越に富

土山見えたり山八分よりあらは也

元政やひねくり廻すふしの雪(朱)
背か、ら、物、い、ふ、富、土、や、雪、の、く、れ(朱)

十四日夜明てたつ桔梗原にて風吹出す

鍵持の馬に乗たる寒さかな

といひ捨ぬる本山と奈良井の間に桜沢の橋是より大方木曾と申ならはしける

キ、(朱) 檜の木香や木曾の旅さかひの冬衣

又夏のころは

よめ入(朱)に、水無月(朱)や木曾路の妹は蚊屋もなし(朱)もたず(朱)

(略)

十五日夜いとふ深きに時を寝わすれて出ツ宮の腰にて明たり雨少そほる木曾やしきの覽古

木曾やしきからみ大根大根畑のしくれかな(朱)の引時(朱)分

かけ橋の絶景

キ、(朱) かけはしや額板のぞく冬の月

夏の匂又爰にかきつく

掛橋キやあふなけもなき蟬の聲

寢覚の床にいざなはれて立寄ル

旅、木曾の瘦一つは雪の寢覚かな

(略)

十六日鶏におとろかされて旅のかりやを出たり馬上の吟

夜の霜(朱)の、夜(朱)や木綿合羽のすくみけり(朱)を、つき(朱)通(朱)す

(略)

十八日鶏鳴に出ぬ茅店の月に鞭をあけたり馬士のいひるは関といふ所へは太田の宿より路程二里余の廻りとかたりぬ孫六や

(略)

病後歳暮

○其

針の口に風のしみけり季のくれ

○

丙申歳旦

(略)

其

元日や関東衆の国ことは

早春野望

其○(朱)

古和佐や赤菜の中の春の風

○

(略)

亀城春霞

(略)

古キ

古寺や仏にとまる村つはめ

入集

墓原やいつもり捨てし桃の花

わたぬきの似合兼たる遊女かな

飯櫃のうつり香つらき火燵かな

煤掃てしはしなじまぬ住居かな

吹入て背筋をはしる霰かな

ころみむ清水にとる松の花

題貧家

入集

同

同

同

同

○

御 稷 川 孕 女 か す た く 音

織 女 や 宿 直 袋 の 西 瓜 出 せ

我 跡 へ い ぐ ち 立 寄 清 水 か な

染 一 番 に 案 山 子 を こ か す 野 分 か な

山 こ え て 聲 か 田 を 見 む 夏 の 月

瀬 田 の 橋 上 り 下 り や 初 あ ら し

何 と な く 獄 の 廻 り の 虫 の 声

訪隠士不逢

・ (悉) 其 人 の 紙 の き れ め や 蔦 紅 葉

・ (悉) 喰 の こ す 柚 嗜 の か ま の い と かな

捨 や ら ぬ (朱)

題十二月

(略)

三 月 正 月 の へ き 餅 ほ つ す 彌 生 か な

(略)

五 月 早 引 菜 に 取 つ く ま て や む な ふ く れ

(略)

七 月 早 引 菜 に 取 つ く ま て や む な ふ く れ

一日千句追加

キ

ニ字(悉)

番合

題月

同初嵐

同虫

キ

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

・ (悉)

○ 八月蚊屋とりて天井たかき寢覚かな
九月かた角を残して刈し晩稲かな

(略)

市中閑居

○ 八朔や人こやねを詠けり
十人に九人はかふる頭巾かな
我門の雪をふみ消す師走かな

(略)

山居

○ 折ためていつ迄喰はむ干薇

村居

民の秋いそかしき迄あはれ也

貧居

夕煙木の葉見る間もなかりけり

香合霞

山科の禮に行日やうす霞

同柳

坂本は浪人のすむ柳かな

同掃厂

唐僧に通する厂のわかれ哉

同初餅

初餅に平家の蟹がゑほしかな

同すみれ

家うりて残りし物やすみれ草

キ 不好 同永日・(朱)

○ 永き日は寝ても起ても寛かな

同薇

物しりの喰残したる薇かな

同霜

傾城の母親おもふ霜夜がな

網代守宇治の駕籠かきと成（朱）にけり（朱）

炭竈や酒天童子（朱）か（朱）台（朱）所（朱）

大仏のやね閑なるあられかな

馬市の中にあやしき角頭巾

古（朱）し 題冬梅（朱） 十月の梅の盛やうりやしき

同 梅早ししる谷越への畠中

題夏菊 夏菊や肥たる人の丸裸

キ（朱） 題三ヶ月 三日月や灸のふたにうすおもひ

題山家蛙（朱） 茎桶（朱）に飛（朱）込（朱）む（朱）す（朱）ま（朱）ひ（朱）かな

キ（朱） 不好（朱） 寒（朱）の中（朱）た（朱）ま（朱）く（朱）雨（朱）の静也

題塔の雪 塔の雪大工のつもる東寺かな

キ（朱） 十二月十九日（朱） 俳友虎角子（朱）身（朱）ま（朱）か（朱）る（朱）ける（朱）二（朱）

キ（朱） 二字（朱） 春雨やはなれく（朱）の金屏風

鶯やう治の茶藪の雪覆

十二日（朱） 慈母の古墳（朱） 十二年おかみてかへる柳かな

春雨や丹波いかきの二重笠

〇 〇 〇 〇

キ○(巻) 藪 入や親なき里の春の雨

(略)

キ・(巻) 西 東六条とのゝ牡丹かな

キ 善利といふ所の隠家を敲て

かくれ家や柳も植す藪の中

キ古し上巳・(巻)

瘦桃の花にめでたる雛かな

四日

人こぞる四日の芝の汐干哉

木道子か山家に分入るをきよて

里の名や哥にもよます桃の花

狼に喰はれてかへれ山桜

キ・(巻) 鷓 にながわらせけり雉の玉

(略)

キ・(巻) のほり竿おほつかなしや五月闇

明る夜のかはやのかきや蚊の行衛

(略)

近陽彦根城十境

北野寺梅林

梅植てそこらに寝たる靈夢かな
神の梅念仏申て拜みけり

(略)

普門白桜

清水の人たちおもふ桜かな

・(巻)

庚申堂藤

鳥籠山郭公

愛宕山新樹

和峰紅葉

西湖夜月

八幡秋野

松原時雨

教ぞへなは防主やかたん桜陰
衣きぬ法師見くるし桜山

(略)

飛つきて半分ちきる藤見かな
釣鐘に巻つくまてか藤かつら

(略)

床山何喰ふて居るほとゝきす
杜宇近江守か奏したり

(略)

山の蚊の齧とかる茂りかな

(略)

あはれさや糧にもかれし木ミの色

(略)

塩ならぬ蛤ふまむ月の湖
百艘にうやまはれけり浦の月
月の夜や三尺程の竹生嶋

(略)

鳩の腹ふくれぬ萩のこほれ哉
塩うりの松原はしる時雨かな
松原の御製にもるゝ時雨かな

磯山暮雪

磯山の浪人とはむ雪の暮
何舟そあき人かへる雪のくれ

(略)

しからき

しからきや僧とつれだつごまめ壳

比叡山

・(巻)初雪や大津の方のひゑるの山

(略)

多賀

・(巻)六月や夕日さしこむへシノ面ン

永瀬寺

・(巻)輪藏の廻り心や秋の風

沖鶴

・(巻)鶯やたまくになく沖の嶋

キ二字(巻) 竹生鶴

・(巻)鷄もなしむか嶋の冬籠り

三井寺

・(巻)秋風や三井に初る枕引

草津宿

雪の日や馬にくはする姥か餅

千枝村

雪のくれ御前蠟燭尋けり

栗本里

・(巻)寒食の頃も過けり岩木掘

瀬田橋

・(巻)旅をせぬ人の東や瀬田の月

(略)

小鳥か池

・(巻)水無月に小鳥か池の経木かな

(略)

松原天神

・(巻)小社や落葉の中の鬼かはら

(略)

元禄未春妹なくなりて跡におさなきもの共あまたこそりてなくま

キ〇・(朱)なき跡の出家むすこや彼岸中(朱)、朧、月、(朱)

(略)

壬申 秋東武行

キ(朱) 初秋やかたひら越に軒の(朱)雨

・(朱)秋風や並木にあてる鏝のさや

不破キ(朱) 閨の戸はこゝらか月のさし所

鳴海 キ〇(朱) 稲妻や山なき国の朝ほらけ

白須賀 佛の干ても残るかつほかな

日坂 秋の日や川をかゝへて越る坂

大井川にて 送り火を見て 翁 聖靈と成らすに越ぬ大井川

うつのやま 十団子も小粒に成ぬ秋の風

七月十五日 到清見寺 盆 棚のむかひはふしか清見寺

箱根路 月の雲桐油は有か坂の駕籠

ふし川 霧のあしをもためぬ渡りかな

題秋 秋風にそよきたらぬや萩の花

露 朝露や下草うりの都入

(略)

○ ○ ○

翁
客中逢仲秋

此秋は月見の友のかはりけり
名月や名もなき浦は浪の音

(略)

月到天心処

動さる星も貴し望月夜

名月や女ましりの唐錦

大きな成家ほと秋の夕かな

芭蕉庵にて

木からしや跡にひかへる富士の山

句合 神楽

夜神楽は果てるか下駄の氷る音

同 寒菊

寒菊の隣もあるやいけ大根

同 時雨

引窓や煙の中の一・時・雨

同 網代

田上や土筋の網代守

翁

有明とかなれは度こしくれ哉

杜鵑瀬田はうなきの自慢かな

大津に侍るころ瀬田にて時鳥をきいて

(俳書叢刊)

九八 『元禄七甲戌歳旦帳』(安永二年刊記『秋露集』合刻による)

年たつや家中の礼は星月夜

其角

筆紅梅をたむ国紙

介我

春も雪茶通の手前ゆたかにて

岩翁

山より見たる夕くれの町

枳風

ひとりたゝ身を遊はせて鳴子引キ

彫棠

蚊やり草干す秋になりけり

横几

有明もすくなき鯖のきざみ物

芭蕉

帆を八合に船頭の声

仙化

次に、岩翁・岩泉・浮萍・亀翁・枳風・仙化・介我・彫棠・揚水・探泉・横几・全峯・神叔・關指・山蜂・湖月・松吟・秋色・平砂
・幸隣・八橋の各発句一。ついで、肅山・蟠羅・黄山の三ツ物三。次に、行露・千崎・磨山・亀仙・鼓角・かしく・湖風・銀杏・杜若・秋香・亀半各発句一。

(竹冷文庫)

九九 『松かさ』

東潮の家にて万句興行の時

勝手とりもつへきよし頼まれて

手に移ヌ蓼すりこ木の雫哉 其角

(竹冷文庫)

一〇〇 『遠帆集』

年たつや家中の礼は星月夜

其角

鳩部屋の夕日しげけし年の暮

(綿屋文庫影写本)

一〇一 『此日』

誹諧 此 日 轍士

二月五日霞に出て青葉の初め武州に至る宿は晋子を尋友は是く^くにまみえて一座興行の露払ひ都へせうそくの祐けとすまた見ぬかたを
おもひやれ共両吟三吟の巻く^くあれは涼みは隅田川に忘れ未は遠く遊の心さしにまかせて秋風の関奥陸国まで機嫌次第にさそふする
にて候

風翁標

卯の花に宿入螺^{カキ}を吹立たり

轍士

杖をふるふ鼻紙の麦

其角

茶を撰ルに茶師の子供の静かにて

介我

房に括りし竹の夕昏

専吟

躡^ヲはふて橋より舟へもの語

未陌

石に鴉の油断してゐる

氷花

道具つむ煤取ル月夜残らん

嵐雪

たはこをあらく刻む小刀

紫紅

下染に心をつくる檳榔子

桃隣

元服はやく通り名を呼

百里

分られて禰宜の被官も宮一ッ

神叔

野菜は買はぬ京流の畑

尺草

女客雀に食を投にけり

岩翁

切リ戸に懸て恋衣干ス

執筆

或隙に盗み写しの歌枕

其角

戴なから足もたす僧

轍士

有馬山田楽串の寄麗也

専吟

棚^カに音なき半天の月

介我

風口の火入にはいる秋の虫

氷花

霧の通して曇る腰張
 花も見す米良の国人老ぬらん
 土のまゝにて狗背を蒸
 枝柿に粉をふり直す春の風
 ちるさき揚屋出入さひしき
 独寝や参宮したる跡の注連
 天氣わるさに桐の花咲
 焼捨て水にしめぬる風呂寒し
 おとこ扨従の木馬蹴ル音
 菰を着て掛川通る旅の暮
 法相宗か哀れ古寺
 塗板を裏へ廻して覺書
 常上下の世の中の人
 幸に起合せたるほとゝきす
 かゝる庵にかゝる摺小木
 夕月に船頭共の暇乞
 三ツ
 竹も丸太も吹倒す秋
 大栗を麻の頭巾に買て行
 草鞋突出す人裸也
 穴蔵の中に火を置き月雨
 双ひてすくむ棚の鶏
 しのふ夜の枕と踵さぐり当
 妹はつかしき恋の六十
 萬葉はよめぬ所を末へ飛ッ
 在名の地をすこし蒙ふる

未陌 尺草 神叔 百里 岩翁 紫紅 桃隣 轍土 嵐雪 立志 其角 未陌 氷花 介我 紫紅 桃隣 専吟 尺草 轍土 百里 乙州 立志 其角 嵐雪 神叔

一度つゝ毎年来る量指
 鳶尾に桔梗を添る投入
 心ほと祝ふ新酒の早ばしり
 棒に乗たる熊野路の月
 真黒な壁の中より花盛
 石龍はしめて人を見る顔
 塩竈に鮫残りて春の水
 的を射ながら休む物売
 今織をほのめかしたる葉入
 三とせかゝりて諷一番
 しる人の在家にありて腹肥す
 筆も枯たる竹の虫屎
 初雪やこの比空はどんみりと
 可笑の社名さえおかしき
 道侯の四筋に分る稲の中
 乞食と鹿の鉄炮に死マ
 朝の月杖を弟子にかつかせて
 氷をくたく真間の繰舟
 市立の帯に付たるはした銭
 三ッ分ンにして置米搗の膳
 口論を支へて扇に打れけり
 是は黄檗是からは宇治
 大嶋の羽織も似合ふ太リ肉
 諒の翁オキに腕を休むる
 亀の息池イキの烟スミの暮わたり

桃隣 紫紅 乙州 百里 嵐雪 未陌 其角 専吟 轍士 乙州 百里 立志 桃隣 尺草 嵐雪 其角 神叔 未陌 氷花 介我 紫紅 桃隣 専吟 神叔 キ角

油かはきてきしる御車
 聞からに樂しき伽羅の三貫目
 此文台は八橋の板
 振袖を二十五仏に着せ飴り
 笛なつかしき花の敦盛
 とりくは一入海苔の磯くさき
 麩に降かゝる春の淡雪
 竹椽をぐすと踏ぬく朧月
 名 缺にて伐ル山吹の枝
 月額を迎ひの者に剃せけり
 柱にさはる三弦の音
 蠟燭の転てしはし消もせず
 四ツをかきりに廻り鎚也
 相手さへ姥か砧の戻かしき
 薪崩るゝ声の齧馬
 暮の月猿を呵れば後向キ
 面白さうに踏をむく妻
 恋種の玉屋は今に玉の紋
 ふとんを仕廻ふ暁の船
 道筋の御旅としるゝ山桜
 うちにぬぬ氣に成し初午
 諸袖を前に卷込春の雨
 人は小橋に治郎見たかる
 何君か櫛おとしても其通り
 奉加の箱に投る百両

乙州 氷花 尺草 轍士 未陌 乙州 百里 嵐雪 立志 専吟 其角 介我 桃隣 紫紅 轍士 尺草 嵐雪 乙州 轍士 桃隣 百里 専吟 紫紅 轍士 氷花

弓形に能登の出張の果もなし

見しらぬ魚は喰はぬ旅人

夢覚て胸に書たる作り文字

十間の座敷の一間金の間

廻り来る轍洗へは花の雪

嘶のつきぬ此日この梅

轍士 九 桃隣 八

其角 九 百里 六

介我 六 神叔 六

専吟 七 尺草 七

未陌 七 岩翁 二

氷花 六 筆 一

嵐雪 七 立志 五

紫紅 七 乙州 六

甲戌のとし

卯月十四日興行

井筒ヤ

庄兵衛板

(酒竹文庫)

一〇二 『藤の実』

さそ砧孫六やしき志津屋敷

(竹冷文庫)

一〇三 『別座舖』

田植まで水茶屋するか角田川

(竹冷文庫)

其角

神叔

介我

未陌

立志

尺草

一〇四 『俳諧童子教』

この人数舟なれはこそ涼み哉
其角
凧や沖よりさむき山のきれ
青海や浅きになりて秋の暮

(綿屋文庫)

一〇五 『卯花山』

年たつや家中の礼は星月夜
其角

東武わたらひの折からキ角子と
閑談して誹諧の事をたつね
侍りしに

我雪とおもへはかろし笠の上
冬木の花の陰にすむ鳥
夕桜

有明の窓に朝日の居替て
物やかましき秋の落水
旅人のいそく気になる初嵐
勸進相撲に見せむ腕先
いま一ツ強盃をかたむけて
命をおもへあとの関守
雲のあし神鳴つへき海の面
団を襟にはさむ後手

下略

其角

一〇六 『炭俵』

(国文学研究資料館・高岡衣笠文庫)

おなごとも七くさはやすを見て

とはしるも顔に匂へる齋かな
其角

ねこの子のくんつほくれつ胡蝶哉
鶯に葉をしへん声の文

あたなりと花に五戒の桜かな
かつらきの神はいつれそ夜の雛

ほととぎす一二の橋の夜明かな

五月雨や傘に付たる小人形

家こほつ木立も寒し後の月

笹のはに枕付てやほしむかへ

女中の茸狩をみて

茸狩や鼻のさきなる歌かるた

庖丁の片袖くらし月の雲

凧や沖よりさむき山のきれ

誰と誰か縁組すんてさと神楽

海へ降霰や雲に波の音

秋の空尾上の杉に離れたり

おくれて一羽海わたる鷹

朝霧に日傭揃る貝吹て

月の隠るゝ四扉の門

祖父か手の火桶も落すはかり也

つたひ道には丸太ころはす

下京は宇治の糞船さしつれて

坊主の着たる簀はおかしき

足軽の子守して居る八つ下り

其角

孤屋

同

其角

同

孤屋

同

其角

孤屋

息吹かへす霍乱の針

田の畔に早苗把て投て置

道者のはさむ編笠の節

行灯の引出さかすはした錢

顔に物着てうたゝねの月

鈴繩に鮭のさはれはひゝく也

雁の下たる筏なかるゝ

貫之の梅津桂の花もみち

むかしの子ありしはせて置

いさ心跡なき金のつかひ道

宮の縮のあたりしき内

夏草のぶとにさゝれてやつれけり

あばたといへは小僧いやかる

年の豆蜜柑の核も落ちりて

帯ときながら水風呂をまつ

君来ねはこはれ次第の家となり

稗と塩との片荷つる籠

辛崎へ雀のこもる秋のくれ

北より冷る月の雲行キ

紙燭して尋て来たり酒の残

上塗なしに張てをく壁

小栗読む片言ませて哀なり

けふもたらつく浮前のふね

孤屋旅立事出来て洛へのほりけるゆへに今四句未満にして吟終りぬ

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

同

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

其角

孤屋

〔古典俳文学大系〕「蕉門俳諧集一」

一〇七 『熊野からず』

植木屋の亭主留守也花いまた

江戸 其角
(綿屋文庫影写本)

一〇八 『七車集』本誌次号に掲載。